

脱動詞化にみられる文法的な意味と機能の存続*

— 動詞条件形の脱動詞化を中心に —

河 在 必**

hajp75@hufs.ac.kr

〈 目 次 〉

1. 序論	2 本論
1.1 本稿の内容	2.1 文法的な意味の存続
1.2 先行研究及び本研究の位置づけ	2.2 文法的な機能の存続
	3. 結論

Key word : 動詞条件形(verbal conditional form), 脱動詞化(deverbalization), 文法化(grammaticalization), 語彙化(lexicalization), 存続(persistence)

1. 序論

1.1 本稿の内容

現代日本語の動詞条件形である「すれば」「すると」「しても」の形は、基本的に複文のなかで、従属文と主文との間の《条件づけ・条件づけられ》の関係を表すために用いられる。たとえば、言語活動を表す動詞「いう」の条件形「いえば」「いうと」「いっても」の形は、例1～3のように使われる。

* This work was supported by the Ministry of Education of the Republic of Korea and the National Research Foundation of Korea (NRF-2017S1A5A8021855), and Hankuk University of Foreign Studies Research Fund.

** 韓国外国語大学日本語通訳学科 助教授, 現代日本語文法

- 1)羊飼いの少年が『おおかみだ』**といえば**、村人は助けに行くだろう。(作例)
- 2)羊飼いの少年が本当のことを**いうと**、村人は怒りだした。(作例)
- 3)羊飼いの少年が『おおかみだ』**といっても**、村人は仕事を続けた。(作例)

上記の条件形のうち、どれを使うかによって、従属文と主文にさしだされている出来事の間の意味的な関係は変わってくるものの、いずれも語彙的には言語活動を表し、従属文の述語として機能している。そして、必要に応じて、例4～6のように、極性・ヴォイス・アスペクトなどの文法的なカテゴリーにそった語形変化が可能である。

- 4)羊飼いの少年が『おおかみだ』**といわなければ**、村人は助けに行かないだろう。(作例)
- 5)羊飼いの少年に本当のことを**いわれると**、村人は怒りだした。(作例)
- 6)羊飼いの少年が『おおかみだ』**といっけても**、村人は仕事を続けた。(作例)

以上のような語彙的な意味、構文的な機能、形態論的な語形変化の特徴から、これらの条件形は動詞らしさをもっているといえる。

一方、周辺的ではあるが、「いえば」「いうと」「いっけても」は、例7～9のように動詞らしさを失って、後置詞に発達したり、接続詞や複合的な陳述副詞¹⁾を構成する要素になったりする²⁾。

- 7)それに、私は20系客車が好きだ。上越新幹線を上野まで通すより、いや、通してもいいが、この寝台急行『天の川』を廃止しなくてもいいではないか。/廃止する理由は、赤字だからということだろう。しかし、**赤字の額からいえば**、上越新幹線の方がはるかに大きい。(西村京太郎『寝台急行『天の川』殺人事件』)
- 8)また、イギリス人とかフランス人、あるいはドイツ人などは呼び方として

1) 本稿でいう「陳述副詞」は、文の全体にかかる副詞的な形式を言い、一般言語学の「文副詞(sentence adverb)」に当たる。
 2) 動詞からの変化のバリエーションや変化後の意味・用法については、高橋(1983, 2003)、河(2016a, 2016b)に詳しく述べられている。

もしっくりくるが、ルクセンブルク人、リヒテンシュタイン人、ギニアビサウ人、ブルキナファソ人、サントメプリンシペ人、バルバドス人、……などのように小国の名前に『～人』をつけても、これまたピンとこないでしょう？**なぜかといえば**、あるていど数量的にスケール感がないと、『～人』の概念が明確に浮かび上がってこないからなのです。(吉村達也『血液型殺人事件』)

- 9)『なるほど、そういうものですかねえ——、しかし、**なんと**いっても今度の人事で、一番可哀そうなのは、私に期待をかけてくれた部下たちですよ、(下略)』(山崎豊子『華麗なる一族(中)』)

管見のかぎり、現代日本語の脱動詞化に関する研究は、主に脱動詞化した形式の意味・用法の記述に注目しており、河(2017)に文法的な意味と機能の存続に関して大まかな指摘はあるものの、動詞条件形と脱動詞化した形式との文法的な側面の関連性に関する本格的な議論はほとんど行われていないようである。

そこで、本稿では河(2017)の指摘を補いながら、動詞条件形の文法的な側面に注目して、どのような性格が脱動詞化した用法に残っているかを考察する。

1.2 先行研究及び本研究の位置づけ

動詞条件形の脱動詞化をめぐる文法的な側面の考察にあたって、動詞の語彙・機能・形態における一般的な特徴を確認したうえで、動詞条件形の位置づけ及びその体系を確認する(1.2.1)。次に構文的な観点からみて非終止に位置する動詞条件形のもつ文法的な特徴と、動詞条件形が脱動詞化を引き起こしたときにみられる語彙・文法面における特徴を確認する(1.2.2)。最後に、言語変化の過程において、以前段階の性格が残っていることについて指摘している研究を紹介したうえで、本研究の位置づけを行う(1.2.3)。

1.2.1 <動詞>の一般的な特徴と<動詞条件形>の位置づけ

本稿では、鈴木(1972)、言語学研究会・構文論グループ(1983)、奥田(1986、2015)、高橋(2003)などの研究にもとづいて、動詞の語彙・機能・形態の一般的な性格についてまとめる。ここで、動詞の一般的な性格から確認する理由は、動詞条件形の脱動詞化の考察にあたって、動詞らしさの規定ができていなければ、脱動詞化した形式の分類をはじめ、その形式の意味・用法上の特徴も明確に捉えることができないためである。

さて、動詞らしさに関する規定は、動詞の語彙的な意味、構文上の機能、そして、その形態論的な語形変化にもとづいて行われる。典型的に、動詞は語彙的には人やものの運動(動作・変化)を表し、このような語彙的な意味をもとにして、機能的には、主語にさしだされる人・ものの運動を表す述語として働く。そして、この述語としての機能にあわせて、テンス・ムード・アスペクトなどの文法的なカテゴリーにそった多様な語形変化をする。

典型的に動詞は終止の位置で述語として機能するのだが、終止以外のところにも位置する。それで、動詞の機能は、その構文的な位置から《終止》、《連用》、《連体》、《接続》といったカテゴリーに分けることができる。そして、それぞれの機能を果たすために、《終止形》、《連用形》、《連体形》、《接続形》といった形態論的な形をとる。より包括的なパラダイムを提示しながら説明すべきところだが、紙幅の制限のため、本稿では《接続形》に限定してまとめる³⁾。

《接続形》は、《条件づけ》、つまり広義の因果関係を表すために、従属文の述語のとり形である。接続形は、従属文と主文にさしだされる出来事間の関係を表しているが、その意味的な関係のタイプと論理のくみたて方から〈表1〉のように分けることができる。

3) 《終止形》、《連用形》、《連体形》の体系は、奥田(2015)、鈴木(1996)を参照していただきたい。

〈表1〉 《接続》における意味関係のタイプとその代表的な形

	原因	条件	きっかけ	うらめ条件
《対象の論理》	するので	すれば	すると	しても
《私の論理》	するから	するなら したなら	したら	するのに したのに

本研究では、条件、きっかけ、うらめ条件を表す形式を《動詞条件形》として取り扱っているが、脱動詞化は、基本的に網掛けをしている、《対象の論理⁴⁾》の系列に属している形式から起こっている。

1.2.2 非終止の《動詞条件形》の文法的な特徴と脱動詞化における特徴

いくつかの動詞において⁵⁾、その条件形が動詞らしさを失って、文法的な機能を果たす形式に《文法化(grammaticalization)⁶⁾》したり、他の形式とくみあわさって、話し手の文の述べ方を表す表現に《語彙化(lexicalization)⁷⁾》したりする。動詞条件形から脱動詞化が起こりうる背景には、何より、動詞条件形＝非終止という構文的な位置の要因がある。以下の例10、11をご覧ください。

文の時間性の観点からみると、例10は、未来の出来事を表し、例11は過去の出来事を表すが、いずれの場合においても、従属文の述語は、《条件》を

-
- 4) 《対象の論理》と《私の論理》は、言語学研究会・構文論グループ(1985)、奥田(1986)の用語である。これらの研究では、複文(つきそい・あわせ文)を、対象の立場から論理をくみだしているか、それとも、《私》の立場から論理をくみだしているか、その論理のたて方の観点から《対象の論理》と《私の論理》の系列に分けた体系を提示している。系列間の文法的な違いは、まず、主文(いいおわり文)に用いられる《文の通達的なタイプ》—平叙文、命令文、まちのぞみ文など—の違いとして現れてくる。《対象の論理》の系列に属する形式の主文は、基本的に平叙文に限られる特徴がある。この「平叙文に限られる」という制限も《対象の論理》の系列に属する形から脱動詞化の起こりやすい背景となるだろうが、詳しいことは稿を改めたい。
- 5) すべての動詞において脱動詞化が起こるわけではない。調査のかぎり、「みる」「いう」「おもう」「あげる」のほか、約二十項目の動詞にかぎられるようである。
- 6) 語彙的な要素や構文が文法的な機能を果たすために、ある言語的なコンテクストに入ってくる過程のことをさす(Hopper and Traugott 2003)。
- 7) ある言語的存在が慣用化され、語彙目録に編入したりする現象をさす(Brington and Traugott 2005)。

表すために、「行けば」の形が用いられている。つまり、動詞の「すれば」の形にはテンスといった形態論的なカテゴリーはない。

10) 今年の夏、おじいさんのところに**行けば**、とうもろこしが食べられるだろう。(作例)

11) 昔、おじいさんのところに**行けば**、とうもろこしが食べられた。(作例)

動詞終止形の場合、その形式には話し手の現実との関係を表す陳述的な意味が反映され、テンス・ムード・アスペクトなどの文法的なカテゴリーの体系ができあがっている。一方、上記の例10、11の「すれば」の形をはじめ、「すると」「しても」のような条件形の場合、終止形の場合とは違って、未来・過去といった時間性は反映されておらず、文法的なカテゴリーが部分的に欠けている。

構文的な位置によって文法的なカテゴリーの実現に制限があるということは、言い換えれば、非終止に位置する動詞には、動詞らしさの典型性が欠けていることを意味する。このような性質から、動詞条件形における脱動詞化の現象は、ひとまず、動詞の構文的な位置によるものと考えられる。

以上のように動詞条件形は、本質的に脱動詞化する性格を備えているわけであるが、実際に、脱動詞化が起こったとき、その語彙・文法的な特徴を本動詞の用法と比べてみると、〈表2〉のようにまとめることができる。

〈表2〉 本動詞の用法と脱動詞化した用法における語彙・文法的な特徴の比較

	本動詞の用法	脱動詞化した用法
文の構造	二つの事象がさしだされる複文	単文へ移行する(移行しつつある)
主文の述語のタイプ	動詞述語が中心的	動詞述語だけでなく、名詞述語・形容詞述語も使われる
語彙的な意味	語彙的な意味を保っている	語彙的な意味が抽象化・希薄化される
形態論的特徴	文法的なカテゴリーにそった語形変化が可能	語形が固定される
条件形の使い分け	動詞条件形の意味・用法上の違いが存在する	意味・用法上の違いがほとんどなくなる

河(2016b : 185)

〈表2〉から分かるように、脱動詞化が起こると、文の構造をはじめ、様々な語彙・文法的な側面に変化が伴われる。しかし、それにしても、序論で述べたように、動詞条件形としての文法的な意味と機能が生き残っていると考えられる。

そこで、次節では、文法化の様々な原理のうち、文法化する前の性格が文法化した後にも残っていることについて触れている研究と、本稿で取り扱っている文法的な側面の存続について指摘した研究を紹介し、本稿の位置づけを行う。

1.2.3 文法化の過程に残っている以前段階の文法的な側面

文法化を取り扱っている研究をみると、主に、文法化の過程における変化に注目する。そして、変化後にみられる様々な特徴について考察しながら、その特徴がどこから生まれてきているかを説明する。

Hopper(1991)は、文法化が起こる際にみられるいくつかの原理について述べているが、そのなかで、文法化した形式の意味と機能と、その形式の語彙の歴史との関連性を述べている。Hopperは、この原理のことを≪persistence≫といい、以下のように規定している。

- (4) *Persistence*. “When a form undergoes grammaticalization from a lexical to a grammatical function, so long as it is grammatically viable some traces of its origin lexical meanings tend to adhere to it, and details of its lexical history may be reflected in constraints on its grammatical distribution.”

(Hopper1991:22)

具体例として、西アフリカにあるGã語において、本来「とる」の意味を表す動詞「*ke*」から対格のマーカが発達しているケースを取り上げている。このマーカが使われる対象は、本動詞の用法において「とる」ことができるものに限られる。たとえば、例12の「*wòlò*(本)」は手にとることのできる対象で、対格のマーカとして「*ke*」が使われている。

- 12) È kè wòlò ìmè-sí
 she OBJ book lay-down
 ‘She laid the book down’

しかし、例13の場合、対象となる「wòlò(卵)」は、直接手にとって影響を与える対象でなく、動詞の表す生産活動によって作られたものであるため、「kè」は使えない。

- 13) È ìmè wòlò ' ‘She laid an egg’
 BUT NOT: * È kè wòlò ìmè ‘She kè egg lay’

このように、文法化において、もとの語彙的な意味が変化後の形式の使用に制限として生き残っている場合がある。しかし、本稿は、もとの語彙的な意味が文法化した形式の分布を制限することではなく、文法化・語彙化する前の単語のもっている文法的な意味と機能といった文法的な側面が文法化・語彙化が起ったあとでも生き残っていることを取り扱う。そういう点から、本稿は単語の文法的な側面の存続について考察する研究として位置づけられる。

ところで、現代日本語の動詞条件形から脱動詞化した形式の用法において、動詞条件形本来の文法的な側面が残っていることは、河(2017: 186–188)に指摘されている。本稿の内容は、基本的にその指摘した内容にそっているが、河(2017)の段階では提示されていなかった構文的な特徴を盛り込んで、考察の内容を補う。

2. 本論

以下、本論では、動詞条件形から生まれた形式のうち、代表的なものを取り上げながら、脱動詞化した形式における文法的な意味とその機能の存続を述べる。

2.1 文法的な意味の存続

動詞条件形は、ある出来事の成立を仮定し、その出来事の成立によって、他の出来事が成立することを表したり(例14、15)、または、ある新しい出来事の成立にもかかわらず、前の別の状況のもとで生じている出来事が相変わらず生じることを表したりするときに使われる(例16)。

- 14)「いくつに見えますか」/「髻はいつも実際の年齢より上に見られるので、こう言われるのは慣れていた。」「そうねえ、五歳ぐらいは上じゃないかと……」/「気に障ったらごめんなさいと言わんばかりに、礼子は語尾を濁した。」「老けて見えますか?」「ずいぶんしっかりしてらっしゃるんだもの」/ 老けていると言えば傷つけどうが、しっかりしていると言えば、褒め言葉になる。(鈴木光司『ループ』)
- 15)ところで私は、昨日までのバイトを止めました。稽古や制作の仕事で忙しくなり、定時に働くのが難しくなったからです。でも安心して下さい。近所のホテルでのバイトを早速決めてきました。こっちは時間が自由だし、時給も少しいいのです。ホテルなんて言うと母さんは眉をしかめるでしょうね。だけどやりたいものの為になにかをするのは当然のことだし、私は何とも思いません。」(角田光代『幸福な遊戯』)
- 16)夕食の時、久子とドンドン酒を飲んだ。宏が酒酌をしてやると、あつという間に飲み干して、また猪口を差し出してくる。/もう大分酔っているのだ。/宏が、大丈夫かという顔で見ても、久子はニコニコと笑って猪口を突き出してくる。宏が、仕方なく注いでやると、久子は、あつという間に飲んで、またニコニコ猪口を出した。(鎌田敏夫『金曜日の妻たちへ(下)』)

「すれば」「すると」「しても」の形のうち、どれを使うかによって、従属文と主文との意味関係は変わってくる。しかし、いずれの場合においても、従属文の述語が条件形をとっていると、そこには従属文にさしだされる出来事以外の、別の出来事存在が含意される。

例14、15の場合、両方ともに、これから起こりうることを従属文にさしだし、その従属文の出来事が成立する場合、どのような結果がもたらされ

るかと思つたことを述べている。ここで、従属文にさしだされる出来事以外の、別の出来事は、例14の点線で示した部分のように明示的に想定できる場合もあれば、例15のようにコンテクストから想定できる(「立派な会社で働くと言えば…」)場合もある。一方、例16の場合、新しい状況として従属文の出来事がさしだされているが、その結果は依然として変わらないことが主文にさしだされている。このような譲歩的な関係を表す条件文では、点線で示しているように、すでにある状況のもとでも同様の結果が生じていることが前提になる。

このように、動詞の条件形の使用には、条件としてさしだされうる別の出来事存在が含意されるわけだが、この性格は《評価・判断の根拠》を表す後置詞化した場合や《アプローチのし方》を表す複合的な陳述副詞化している用法において、別の根拠、別のアプローチのし方の存在を含意する形で存続する⁸⁾。

たとえば、例17、18の場合、ある物事に対する判断・評価が別の根拠、別のアプローチのし方によって変わってくることを述べている。また、例19の場合、ある物事に対する判断が別の根拠、別のアプローチのし方においても変わらないことを述べている。

17)「あのね、ワタナベ君はとってもいい奴だよ!」飲み会にいくと、いつしか部長が隣に座っていて、私の耳元で彼のことを誉めちぎった。確かに部長のいうとおり、彼は人望が厚かったし仕事もそれなりにやっていた。**部長からみれば**とってもたよりになる、信頼できる部下なのかもしれないが、**女性からみると**、「ちょっとねえ……!」という雰囲気だった。(群ようこ『無印結婚物語』)

18)「どんな手があるんです!」おどした。ゆすりと言われても俺は平気だぞ。連

8) そもそも動詞条件形からの、こういった後置詞や複合的な陳述副詞の用法をみると、「こういう根拠にもとづけば、あるいは、こういう観点から考えれば、こういう結論になる」という論理関係になっている。この論理関係は、動詞条件形の本動詞の用法が「こういうことが成立すれば、こういう結果になる」という因果関係を表すことと関連していると考えられる。大まかにいえば、現実世界の出来事間の関係が、話し手内部の論理関係に変わっているということになる。このことに関する考察は稿を改めたい。

中には汚れた面がいくらもある。そのひとつを使うんだ。たとえば日本の近くに、或るむずかしい立場の政府がある。」「どこのことです。台湾ですか。」「なんとでも思え。国際的には小康状態を保っているが、歴史的に見ればなんと不安定な政府だ。(半村良『産霊山秘録(下)』)

- 19)ところが、神経細胞が複雑に結合しあった脳というシステムにおいては、記号の同一性のような、〈あるもの〉が〈あるもの〉であることを保証することこそがむずかしいと考えられる。神経細胞の活動パターンとして記号のように安定して存在するものを成立させることは、構造的に見ても、ダイナミックスという観点から見ても、本来むずかしい。(茂木健一郎『意識とはなにか ― 〈私〉を生成する脳』)

動詞条件形から発達した形式の使用に別の根拠やアプローチのし方などが含意されることは、以下の例20、21のように、コンテクストに別の根拠やアプローチのし方が明示されていなくても、条件形から発達した後置詞や複合的な陳述副詞を「～は」のような、とりたての形に言いかえることができることから傍証できる。

- 20)私からみれば源田のくそばあは、人間関係をぶちこわす、悪魔の手先みたいな奴だったが、…(下略)(群ようこ『無印失恋物語』)
→ **私にとっては**、原田のくそばあは、人間関係をぶち壊す、悪魔の手先みたいなやつだったが…
- 21)「だから、おかしいんだ。生物学的に言えば山村貞子は女ではなく男なんだから、子供を産めるわけがねえ。おまけに死ぬ直前まで処女だったしよお。……それに」(鈴木光司『リング』)
→ **生物学的には**山村貞子は女ではなく男なんだから…

また、動詞条件形から発達した形式の使用において伴われる含意は、動詞中止形から発達した後置詞や複合的な陳述副詞の使用と比べることで確認できる。本来の動詞中止形の使用には、文中に現れてくる出来事間の関係のみを表しており、条件形の場合のような、別の出来事に関する含意はない。

22)新聞は金融界の主張に好意的だが、それを強く意識しないほうがいい。**私の経験からいって、マスコミは非常にバランス感覚を重要視する。**浮気なものだ。(高杉良『金融腐蝕列島(下)』)

23)「運のゲーム」というのは、まえから何べんもひきあいに出している、たとえばサイコロのようなものであって、どのような目がでるかは何だれにもわからない。**奇数が偶数かは確率論的にいって、二分の一である。**もちろんこれはあくまでも確率論の問題であるから、偶数がつづけて三回でることもある。(加藤秀俊『パチンコと日本人』)

そのため、例22、23の「いって」を「いえば」に変えると、今まで述べてきたように、別の根拠や別のアプローチのし方の存在を含意するようになってしまう。

2.2 文法的な機能の存続

動詞条件形は複文にさしだされる二つの出来事をむすびつける＝《接続》の構文的な機能をもっている。この《接続》の機能は、動詞条件形が脱動詞化した場合、《接続助詞》、《接続詞》の用法のなかに存続している。

今までの調査のかぎりでは、《接続助詞》の用法は、基本的に「いう」「おもう」の条件形が、その発話内容、思考内容を示す「～と」に後接する場合から生まれる⁹⁾。

いずれの場合においても、動詞条件形の本来の語彙的な意味は薄れてい

9) 現代語の作品からは見当たらないが、明治期の作品では、「～(か)とみれば」「～(か)とみると」の形で接続助詞化している場合が確認できる。

・魚と鳥との鬭はいよいよ激しく、湖水の面ゆらぐまにまに、幾重ともなき大なる環を畫き出せり。鳥の翼は忽ち斂まり、忽ち放たれ、魚の背は浮ぶ**かと見れば又沈みつ**。(森鷗外『即興詩人』)

・そして、校長は氣の毒相な顔をし乍ら、健にはぞんざいな字で書いた一枚の前借證を返してやる。渠は平然としてそれを受取つて、クルクルと圓めて火鉢に燻べる。**淡い焔がメラメラと立つかと見ると、直ぐ消えて了ふ**。(石川啄木『足跡』)

これらの例から、引用句節を伴う動詞の条件形の場合、接続助詞へ発達しやすいと仮説が立てられる。この仮説の検証及び「みれば」「みると」の接続助詞化に関する調査は今後の課題にする。

るか、抽象化されているが、二つの事象をむすびつける《接続》の機能は保たれている。例24で「いえば」は、「といえば」の形式となって、結果・結論を表す従属文と原因・理由を表す主文とをむすびつけている。一方、例25で「おもうと」は、「とおもうと」の形式となって、時間的な隔たりのない、継起的な二つの出来事をむすびつけている¹⁰⁾。

24) 太郎は、タン・シチューを煮たのである。なぜこのような料理を作ることになったかと言えば、三吉杏子を、ずるずるとクララ寮まで送って行って、その入口に、あまり大きくはないけれど、月桂樹の木を見つけてしまったからだった。(曾野綾子『太郎物語・高校編』)

25) パリッ。一何だか変な音がしたと思うと、ドアのチェーンが、ネジごと取られて、ドアが開いた。もうこわし始めたのかな。/「一細矢つてのは?」と、目の前の男が言った。(赤川次郎『秘書室に空席なし』)

要するに、ここで動詞条件形は従属文の述語という構文的な地位は失っているが、従属文の述語にくつつく要素となって、従属文にさしだされる出来事と主文にさしだされている出来事とをむすびつける《接続》の機能は保っている。

そして、「といえば」「(か)とおもうと」のような接続助詞は、例26、27のように、前方指示のソ系列の指示表現を伴うことで、テキストレベルで先行文と後続文とをむすびつけるようになって、接続詞へ発達していく。

26) ホームレスの男とは、もう計画実行前には会えない。事が成功したのが確認されてから十日後に、残金を支払うために会う約束になっている。なぜそうしたかといえば、十日も経てば事件のゴタゴタが一段落しているはずだからだ。(吉村達也『ふたご』)

27) 地下に降りていくと、黒服の男がドアを開けてくれた。謙一郎が受付に何やら言って奥に通された。パーは英国風の重厚なインテリアである。ソファのところで、スーツを着た男たちが小さなグループをつくって

10) 「とおもうと」が接続助詞として使われていることは、「とおもうと」を「とたん(に)」に言い換えることから確認できる。詳しくは、河(2014)を参照していただきたい。

いる。そうかと思えば、端のテーブルでは、大柄な白人の男がブランデーグラスを片手にひとり本を読んでいた。(林真理子『野ばら』)

テキストレベルにおいて、先行文との意味的な関連性が認められると、先行文との関連性を示すために取り入れた、ソ系列のような前方指示の形式は必要なくなる。それで、前方指示の形式は省かれ、例28、29のように、「なぜかという」と「かとおもうと」のような形式が使われるようになる¹¹⁾。

28) 三原は、その目撃者の証言が非常に重大なのに、このとき気づいた。なぜかというと、「佐山とお時とが、仲むつまじく特急に乗った」という言葉が、この二人の情死説を裏づける、ほとんど唯一の証言となっているからだ。(松本清張『点と線』)

29) ピクニックをする家族の向こうに、波打ち際に立つ男の子の小さな影があった。男の子は、おそろおそろ波に近づき、足を濡らさないようにして、すうっと水から離れてゆく。かと思うと砂の上にしゃがみ込み、穴を掘ったり砂を積み上げたりしている。(鈴木光司『ループ』)

以上のように、動詞条件形が動詞らしさを失って、接続助詞、接続詞の要素として用いられるものの、動詞条件形の本来の構文的な機能である「接続」の性格は存続されている。ただし、本動詞の用法では、複文＝文レベルにおける「接続」の機能をしているが、脱動詞化をすると、テキストレベルにおける「接続」の機能を果たすようになって、その機能が拡張される。

ここまで、条件形のもつ文法的な意味が存続している場合と、条件形の文法的な機能が存続している場合に分けて考察を行った。一見、この二つの存続のタイプが脱動詞化した用法—後置詞か、接続助詞かなど—にそって分かれるようにみえるかもしれない。

しかし、文法的な意味と文法的な機能は、言語形式の文法的な側面を構

11) 「なぜかという」と「かとおもうと」のような接続詞の発達における詳細は、河(2013、2015)を参照していただきたい。

成する要素であって、両者を切り離して考えることはできないだろう。このような観点からみれば、文法化・語彙化の結果、文法的な側面のうち、ある側面だけが存続しているとみるのは、単純な捉え方であろう。

むしろ、ある用法においては、特定の側面が他の側面に比べ、より目立った様子で存続し、別の用法においては、複数の側面が優劣をつけがたい様子で存続していると見た方が適切かも知れない。

前者の場合は、すでに述べているから、後者の場合を簡略に述べよう。具体的な例として、話し手の述べ方を表す、複合的な陳述副詞のうち、「簡単に言えば、一口で言えば、大雑把に言えば、正確に言えば、厳密に言えば」などの形式の用法があげられる。

30) ホスト氏はAカメさんと自分とを身長だけで比較し、背の高さが同じだからはずボンも同じサイズだろうと判断したわけだが、じつはその際、やはり自分とAカメさんの体重のちがいにも考慮を払うべきであった。というのは、ホスト氏の体重が七十キロ前後だったのに、Aカメさんは九十キロ近くもあったからである。簡単に言えば、ホスト氏が瘦型なのに、Aカメさんは肥満型、ズボンの胴まわりがまるでちがっていたのだ。(井上ひさし『ドン松五郎の生活』)

31) 「犯人は、カメさんのいう通り、完全に、無差別ではなく、名前を限定して、殺している。正確に言えば、名前のイニシアルを、限定してだ。なぜ、そんなことをするのか。(下略)」(西村京太郎『殺人列車への招待』)

これらの形式は、文レベルの観点から言えば、ある物事をめぐって、簡略にしたことを述べるか、詳細にしたことを述べるかといった話し手の述べ方を表している。このような観点からみれば、複数の述べ方のうち、どれかを選び出して述べるから、条件形の文法的な意味が存続していると考えられる。

しかし、先行文をなくしては、これらの表現を使う必要性もなければ、どんな内容を簡略にして、詳細にして述べているかも分からない。そこで、テキストレベルからの捉え方が必要になってくる。仮に、例30の「簡単に言えば」がある物事について述べる内容と、それを単純化して述べる内容

とをむすびつけているとすれば、例31の「正確にいえば」はある物事について述べる内容と、それに情報をつけくわえて精密化して述べる内容をむすびつけているといえよう。

こうしてみると、動詞条件形の文法的な側面を構成する要素のうち、どれかが相対的に目立った様子で存続しているのだが、その一方では、他の文法的な側面も相対的に目立たない様子で存続しているとみるべきではないかと思われる。文法的な側面の多様な存続のし方に関する詳しい考察は今後の課題にしたい。

3. 結論

3.1 まとめ

以上、本稿では、動詞条件形から文法的な機能を果たすようになった形式、そして、話し手の述べ方を明示するようになった表現を取り上げて、脱動詞化によって動詞らしさを失っているにしても、本来の動詞条件形の文法的な側面が存続していることを述べた。

文法的な側面として、《条件づけ》を表す文法的な意味と、複文の中で従属文と主文とを《接続》する文法的な機能を取り上げ、本動詞の用法との関連性を考察した。

まず、動詞条件形の本動詞の使用には《条件づけ》としてさしだされる出来事のほかに、文中には現れていない、別の出来事が存在が含意される。この別の出来事存在の含意は、《評価・判断の根拠》を表す後置詞や《アプローチのし方》を表す複合的な陳述副詞において、別の根拠、別のアプローチのし方の存在を含意する形で存続する。

一方、動詞条件形は、複文の中で《接続》の機能を果たしているが、この《接続》の機能は、接続助詞及び接続詞の用法にも存続する。ただし、接続助詞の場合、文レベルで従属文と主文とをむすびつけているが、接続詞

の場合、テキストレベルで先行文と後続文とをむつびつけていて、結果的には機能するレベルが拡張される。

3.2 今後の課題

本稿では、動詞条件形から脱動詞化した事例をもとに、文法的な側面の存続について述べた。ところが、本稿で取り上げたような脱動詞化の現象は、「～からみて」「正直って」のように、動詞中止形からも生じている。

今後、動詞中止形から脱動詞化した形式の意味・用法において、文法的な側面がどのように存続しているかを明らかにし、その考察した結果を動詞条件形から生まれてきた形式の場合と比較して、共通点と相違点を確認したいと思う。

<参考文献>

- 河 在必(2013)『思考動詞「おもう」の条件形の脱動詞化』『日語日文學研究』85 韓国日語日文学会 pp.343-363
- _____ (2014)『文法化した形式にみられる主観化-類義形式「(か)とおもうと」と「とたん」の比較から-』『日語日文學研究』91-1 韓国日語日文學會 pp.521-539
- _____ (2015)『発話動詞「いう」の条件形の文法化と語彙化-「いうと」「いえば」が疑問文に接続する場合-』『日語日文學研究』93-1 韓国日語日文學會 pp.207-233
- _____ (2016a)『現代日本語における動詞・逆条件形の脱動詞化-「みても」「いっても」の形を中心に-』『日本語教育研究』36 韓国日語教育学会 pp.143-163
- _____ (2016b)『現代日本語の動詞条件形の脱動詞化-動詞条件形「すれば」「すると」の形をとる場合-』『日本研究』40 中央大学校日本研究所 pp.177-201
- _____ (2017)『現代日本語における脱動詞化にともなう言語変化をめぐって-「すれば」「すると」「しても」の形式を中心に-』『日本語教育研究』39 韓国日本語教育學會 pp.177-196
- 奥田靖雄(1986)『条件づけを表現するつきそい・あわせ文-その体系性をめぐって-』『教育国語』87 むぎ書房 pp.2-19
- _____ (2015)『動詞論』『奥田靖雄著作集3 言語学編(2)』むぎ書房 pp.5-114(初出は、奥田靖雄(1992)『動詞論』『北京外国語大学講義プリント』)
- 言語学研究会・構文論グループ(1985)『条件づけを表現するつきそい・あわせ文(三)

- その3・条件的なつきそい・あわせ文— 『教育国語』83 むぎ書房 pp.2-48
 _____ (1986) 『条件づけを表現するつきそい・あわせ文(四)—その4・うらめ
 的なつきそい・あわせ文—』 『教育国語』84 むぎ書房 pp.49-68
- 鈴木重幸(1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房 pp.497-512
 _____ (1996) 『形態論・序説』 むぎ書房 pp.45-55
- 高橋太郎(1983) 『動詞の条件形の後置詞化』 渡辺実編『副用語の研究』 明治書院 pp.293-316
 _____ (2003) 『動詞九章』 ひつじ書房 pp.1-290
- Brington, Laurel and Elizabeth Closs Traugott (2005) *Lexicalization and Language Change*,
 Cambridge University Press, pp.1-111
- Hopper, Paul. (1991) On some principles of grammaticalization. In: Elizabeth Closs Traugott
 and Bernd Heine (eds.), *Approaches to Grammmaticalization*. vol. 1, John
 Benjamins, pp.17-35
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Trougott (2003) *Grammaticalization 2nd Edition*.
 Cambridge University Press, pp.1-211

접 수 일: 2019년 6월 30일

심사완료: 2019년 7월 28일

게재결정: 2019년 7월 30일

<Abstract>

The Persistence of Grammatical Meaning and Function in Deverbalization

—The Deverbalization of Conditional Verb Forms—

Sureba, *suruto* and *sitemo*, which are conditional verb forms in modern Japanese, are used to express causality in a broad sense, and it is widely known that they become deverbalized in some cases. Verbs such as *miru*, a visual verb, *iu*, a locutionary verb, and *omou*, a thinking verb, get deverbalized when they take a conditional form, and they usually turn into postpositions, connective particles, connectives, or sentence adverbs.

However, no connection has been identified so far between usages of such deverbalized verb forms and those of general conditional verb forms. This study examines how the grammatical meaning and syntactic function of general conditional verb forms affect usages of deverbalized verb forms.

Due to the grammatical meaning of conditional verb forms, if an event in the subordinate clause of a complex sentence is expressed in a conditional form, another event is also implicated. For example, the sentence “If it rains, let’s take a taxi” implies a case of not raining, in addition to a case of raining that is mentioned explicitly. Such implication can be identified in usages of postpositions and sentence adverbs that indicate a rationale behind the judgement on, or the evaluation of, a person or object. If a postposition or sentence adverb signals a rationale behind the judgement on, or the evaluation of, a person or object, another rationale is also implied in addition to the explicit one.

In complex sentences, conditional verb forms connect the events of the subordinate and main clauses. Such a function is found in usages where conditional verb forms turn into connective particles and connectives. If conditional verb forms become deverbalized, the connective function expands from the sentence level to the text level. In other words, conditional verb forms simply serve as a connective element within a complex sentence, whereas they connect sentences if they get deverbalized and turn into connectives.